

# 問答リーディングのすゝめ

中本 恭平

## 1. 問答リーディングとは

次の英文をどのように生徒に教えるだろうか。

You go to sleep at night. It is a quiet time. You sink into many hours of doing nothing, but your brain is very busy. (*Revised POLESTAR English Course II*, Lesson 2 冒頭; 以下の英文も同書の同じ課から引用する)

筆者は、読み手が書き手と問答する読み方、略して「問答リーディング」を提唱する。具体的には次のようになる。Qは読み手による問い、Aはそれに対する書き手の答えである。

夜は眠りにつくものだ。

Q: ふつうは誰でもそうだが、それがどうしたか。

A: 眠っているときは、静かな時間だ。

Q: いびきでもかかかないかぎり静かだが、それがどうしたか。

A: 何もしない時間に長時間陥っていくのだ。

Q: 本当に何もしていないのか、仮死状態なのか。

A: いや、そうではなく、脳は激しく活動している。

Q: 脳が活動して何をしているのか。

ここで段落が終わっているのだから、最後の問いに対する答えは次の段落以下に示されているはずである。第2段落は次のようになっている。

Each night, you may go through four, five, or maybe six sleep cycles. Each sleep cycle has four stages. Each cycle lasts about 90 minutes. As you fall asleep you enter stage one, or the alpha state. That is the time you might think of your best ideas. Then you enter stage two, which is a light sleep. Next comes stage three, the quiet sleep. Stage four, the last stage, is the sound sleep, or deep sleep.

問答の続きをやってみよう。

毎晩、4～6回くらいの睡眠サイクルがある。

Q: 睡眠サイクルとは何か。

A: 睡眠サイクルには4つの段階がある。

Q: それぞれの段階はどのようなものか。

A: 1つの睡眠サイクルは約90分続く。

Q: それぞれの段階は何分くらい続くのか。

A: 眠りに落ちると第1段階に入る。

Q: それはどのような段階なのか。

A: アルファ状態の段階である。

Q: アルファ状態とは何か。

A: 最上の考えが思いつくかもしれないときである。

Q: 第2段階はどのようなものか。

A: 軽い睡眠の段階である。

Q: 第3段階はどのようなものか。

A: 静かな睡眠の段階である。

Q: 第4段階はどのようなものか。

A: ぐっすり眠る段階、つまり、深い眠りにつく段階である。

この問答の初めのほうは、問いと答えがかみ合っていない。ここに示した問いは、素直に思い浮かぶであろうと筆者が判断した問いである。書き手が持っているような専門的な知識を持ち合わせていない読み手は、「毎晩、4～6回くらいの睡眠サイクルがある」と言われて、すぐに「いくつの段階に分かれるのか」という問いを発することは無理である。

一方、「4つの段階がある」と言われれば、それぞれの違いを知りたくなるはずだ。この問いに対し、書き手は「90分続く」という別の情報を提供した後、各段階の特徴を説明しており、「それぞれの段階は何分くらい続くのか」という問いには答えていない。そこで、読み手は、「90分続く」というのは補足的な情報として、さしずめ、

Each sleep cycle, which lasts about 90 minutes, has four stages. と解釈することになる。

「アルファ状態」については、この教科書の欄外

に「アルファ波が出ている状態。アルファ波は脳波のひとつで、集中力を高めたときなどに現れる」という解説があるが、問答ではあくまでも書き手の「最上の考えが思いつくかもしれないとき」という答えを待つことになる。いきなり欄外の注意書きに飛びつかないように生徒に注意を促したい。

ところで、「睡眠サイクルとは何か」という冒頭の問いに対する答えをこの段落内から探すと、「約90分続く4つの段階からなるサイクルで、それぞれの段階は…である」となる。結果的に、この答えはこの段落の内容を要約したことになる。問答リーディングは要約作業にも役立つことがわかる。

さらに、上の問答をよく見ると、第1段階から第4段階へと下っていくにつれて「動→静」になっていることがわかる。この教科書には「脳波から見た睡眠サイクル」という図があり、「睡眠の深さ」が「覚醒↔深い眠り」と示されているので、「動→静」であることがこの図からわかる。しかし、ここでもいきなり図に飛びつかず、問答から読み取れることを生徒に気づかせたい。

第2段落から、眠りは徐々に深まることがわかる。「それでは、一番深くなったところで朝を迎えるのか」という疑問を持って、次の段落に目を移す。

The cycle then moves backward through stages three, two, and one. This time, however, stage one is different. Though your eyes are shut, they begin to move back and forth very quickly. This is called rapid eye movement, or REM for short. You begin to dream during the REM period, and your dream ends after 10 to 30 minutes. Again, you move forward through stages two, three, and four. And so goes your night.

この段落の問答は次のようになる。

(第4段階に到達した後)第3, 2, 1段階へと逆向きに戻っていく。

Q: その後はどうなるのか。

A: 第1段階は最初の第1段階とは異なっている。

Q: 具体的にどのように異なっているのか。

A: 目は閉じているものの、(眼球が)前後に激しく動くのだ。

Q: !

A: これは「急速眼球運動」、略して「レム」と呼ば

れる。

Q: レム睡眠中は何が起きているのか。

A: 夢を見始めるのだ。

Q: レム睡眠はどのくらい続くのか。

A: 10～30分で終わる。

Q: その後はどうなるのか。目が覚めるのか。

A: 再び第2, 3, 4段階へと進んでいくのだ。

Q: そのようなサイクルを毎晩4～6回くらい繰り返すのか。

A: そのとおり。

「目は閉じているものの、眼球が前後に激しく動く」という刺激的な情報を受けると、この知識をすでに持っているものでなければ、読み手は仰天してさまざまな問いを発するであろう。「!」と示した箇所では、たとえば、「それは本当か」「なぜ眼球が動くのか」「動いて何をしているのか」「どうしてそのようなことがわかるのか」など、さまざまな問いが生じるであろう。しかし、残念ながら書き手はそれらの問いには答えず、「レム」という名称と、その間に夢を見るという概略的情報のみを提供している。なぜ眼球が動くのか、動かないと夢を見ることはできないのか、などという生徒たちの素朴な疑問を大切にしたい。そして、そのような疑問に対する答えは、生徒たち自身で調べさせよう。教師が頭ごなしに出した問いについて調べて来いと言われるよりも、自分で出した問いについて調べて来ることのほうが、生徒たちにとっては興奮ものはずだ。

今述べたことと関連して、問答リーディングの大きな利点は、問いを意識的に作る練習ができることである。たとえば、第2段落冒頭で、書き手は「毎晩、4～6回くらいの睡眠サイクルがある」と述べている。そこで、「なぜサイクルの回数が一定しないのか」という問いを作ることもできる。残念ながら、書き手はこの問いに答えていない。しかし、ヒントは出している。「1つの睡眠サイクルは約90分続く」ことから推論すると、睡眠時間が長ければサイクル数が多く、短ければサイクル数が少なくなるということではないか。このような問いは授業の息抜きにもなる。クイズめいてはいるが、生徒たちの考える力を育むことは間違いない。

一方、第3段落の内容に関して、なぜ段階1→4の後、段階4→1へと戻っていくのか、換言すれば、なぜ段階1→4、段階1→4というサイクルを繰り返

返さないのか、という問いを作ることもできる。これについても書き手は答えていないので、読み手側が推論することになる。後者だと最も「静」の段階から、いきなり最も「動」の段階へ飛躍することになる。これだとずいぶん激しい睡眠となり、眠りから覚めた後はさぞかし疲れていることだろう。本来、疲れを取るために眠るはずなのに、これでは本末転倒ではないか。言われてみれば当たり前のことかもしれないが、案外当たり前のことに気づかないものである。特に英語のような外国語の勉強をしているときはなおさらである。

さて、第1段落末尾の「脳が活動して何をしているのか」という問いに書き手はどう答えているか。「脳が活動して…している」という直接的な答えはこの3つの段落には示されていない。そこで推論すると、「アルファ状態(でものを考えている)」「脳が活動して夢を見ている」という答えを引き出すことができる。これらの答えが専門的に正しいのかについては、別に調べる必要がある。このように、問答リーディングは段落を超えた内容の把握にも役立つ。

## 2. 問答リーディングの応用

### 2.1. 書き手による問答

ここで、問答リーディングの応用をやってみよう。書き手も意識的・無意識的に問答をやっているはずである。書き手の答えから、その答えに対する潜在的な問いを引き出すかたちで、書き手自身がどのような問答をやっているのかを第1段落を例に取って見てみよう。Qは書き手自身による問いである。

Q: 夜は何をするか。

A: 夜は眠りにつくものだ。

Q: 眠っているときは、どのような時間か。

A: 眠っているときは、静かな時間だ。

Q: 静かな時間で、人はどうなるのか。

A: 何もしない時間に長時間陥っていくのだ。

Q: 脳も眠っていて活動していないのか。

A: いや、そうではなく、脳は激しく活動している。

本稿冒頭に示した読み手による問いと異なっていることがわかる。このことから、読み手が期待する内容が必ずしも書き手によって示されるとは限らないということがわかる。読み手の期待から大きくはずれた場合、読み手がその文章を読み続けるのを中止し、「本を投げ出してしまふ」状態に陥る可能性

があることもわかる。

ここでもう一度本稿冒頭の読み手と書き手の問答を見ると、読み手にとって驚くに値しない情報、既知の情報、旧情報が先に示され、butという逆接の接続詞をはさんで読み手にとって驚くに値する情報、未知の情報、新情報が示されていることがわかる。旧情報→but→新情報という順序で示し、新情報に書き手の言いたいことが述べられているということは、主張文の定式として周知のとおりであるが、問答リーディングではこのような情報構造も簡単に読み取れるという利点がある。

### 2.2. 文構造の観点から

手前味噌を並べて申し訳ないが、問答リーディングの利点は他にもある。文構造を新たな視点から見るができるというのも大きな利点である。たとえば、第1段落のYou sink into many hours of doing nothingという文でより細かく問答をすると、「長い時間に沈み込む」「Q: それはどういう時間か」「A: 何もしない時間である」となる。第2段落のAs you fall asleep you enter stage one, or the alpha state. という文では、「眠りに落ちる」「Q: するとどうなるのか」「A: 第1段階に入る」「Q: それはどういう段階か」「A: アルファ段階である」となり、それに続くThat is the time you might think of your best ideas. では「それ(アルファ段階)は時である」「Q: どんな時なのか」「A: 思いつくかもしれない時である」「Q: 何を思いつくのか」「A: 最上のアイデアである」となる。もうお気づきのことと思うが、これは訳し上げをせず、英語の論理に従った解釈である。

このような問答は、次のような文でも有効である。例文は江川(1991)から引用した。

If you have finished that book, put it back on the shelf. (条件文)

→本を読み終えたら(Q: どうするのか)本棚に戻せ。

When he regained consciousness, he found himself in a hospital. (接続詞 when)

→意識を回復した時(Q: どうなったのか)病院にいたことを知った。

従属節が後ろに来る場合は次の問答となる。

They were driving slowly when another car cut in ahead of them. (同上)

→ゆっくりと車を走らせていた(Q: それでどうなったのか)別の車が割り込んできた。

後者では、「割り込んできたとき、ゆっくりと走らせていた」と訳し上げ方式で解釈するのは時間的順序としては不自然である。ただし、「Q: なぜ他の車が割り込んできたのか」「A: ゆっくりと走っていたからである」のように因果関係を問答形式で読み取るのであれば、その限りではない。実際、この文では、低速走行の車に業を煮やした車が、たぶん猛スピードで追いついて行ったという出来事を伝えようとしている可能性が非常に高い。

It was Terry who hit on this idea, not me.  
(分裂文)

→テリーだ(Q: テリーがどうかしたのか)この考えを思いついたのだ。(この考えを思いついたのは)私ではない。

He has two daughters who are studying music. (関係代名詞)

→娘が二人いる(Q: どんな娘か)音楽を勉強している(娘だ)。

He has two daughters, who are studying music. (同上)

→娘が二人いる(Q: その娘たちがどうしたのか)音楽を勉強しているのだ。

関係代名詞の「制限・非制限用法」も、このような問答を意識すれば、違いがよくわかるはずである。

The plane took off so smoothly that the passengers could hardly feel it. (因果関係)

→離陸がとても滑らかだった(Q: だからどうなの)だ)乗客が気づかないくらい(に滑らか)だった。

### 3. 「問い」の大切さ

問答リーディングの隠れた利点は、生徒自身が主張文を書く場合、たとえば大学入試の小論文などにも役立つことである。岡田(1991)が強く主張するように、論文では「問い」が重要な意味を持ち、「論文答案を書けないのは、自分で『問い』を『つくる』ことができないから」である(同書 p. 140)。ちなみに、筆者の問答リーディングは、岡田氏の同書からインスピレーションを得て開発したものである。岡田氏が指摘するように、問いを「つくる」という作業は、一見簡単なようで、実は案外できていないものである(本稿 p. 19 も参照)。問答リーディングの

応用として書き手自身の問答を確認するとそれがよくわかる。たとえば、第1段落が仮に

You go to sleep at night. You sink into many hours of doing nothing, but your brain is very busy. It is a quiet time.

となっていたら、「脳は激しく活動している」「Q: それはどういう時間か」「A: 静かな時間だ」となり、支離滅裂な文章となるだろう。

子供の頃から「人の話をよく聞きなさい」と耳にタコができるくらい言い聞かされてきた。しかし、「よく聞く」とはどういうことかについては、あまり耳にしない。「人の話を一語一句聞き洩らすな」という意味か。そうではない。そもそもそのようなことは不可能だし、不必要でもある。どうしても一語一句聞き洩らしたくなければ、録音機で録音すればよい。それでは「相手の主張を読み取れ」ということか。もしそうなら、どうすれば主張を読み取ることができるのか。筆者なら「相手と問答するつもりで話を聞け」と答えるであろう。その意味で、筆者は常日頃から、講義を聞く学生たちに対し、「講義中に最低3つ以上の質問を探すつもりで聞きなさい」と指導している。また、ゼミで学生たちに口頭発表させるときも、口頭発表の後の質疑応答にかなりの時間を割くようにしている。

問答する姿勢でコミュニケーションをすると、語用論でよく取り上げられる

A: There's somebody at the door.

B: I'm in the bath. (長谷川他 2006: 130)  
のような暗意を含む文でも、「風呂に入っている」「Q: だからどうなのだ」「A: だから対応できない」と隠れた問答を引き出すことで、相手(B)の言いたいことがよくわかる。

A: Where have you been, Tomoko?

B: Out. (長谷川他 2006: 155)  
のような場合でも、「Q: どこへ行ってた」「A: 外」「Q: それぐらいのことはわかる。具体的にどこへ行ってたのか」「A: (無言)」「Q: 答えられないところか」「A: (無言)」「Q: 何も言わないということは私の推測が当たっているということか」「A: (無言)」「では、そのように解釈する」となる。実際にはこのような問答がほとんど瞬間的に行われているにせよ、このプロセスを経ていることは間違いない。

#### 4. 「書く」「話す」への応用

問答リーディングは読むための手段であるが、書く・話すという発信面にも応用がきく。

POLESTAR 'Function 1'(p. 40)のDavid(D)とRika(R)の対話を、実況中継風に引用する。

D: (リカの様子が変わる) You seem quieter than usual today, Rika. (どうしたんだろう) What's up?

R: (私の異変に気づいてくれた) Thanks for asking, David. (理由を説明しなくて) I'm just having an awful day. (すなわち) Nothing seems to be going right.

D: (やっぱり何かあったんだ) I'm sorry to hear that, Rika. (具体的に何があったのだろうか) Tell me what's wrong.

R: (私の話を聞いてくれるみたい) Everything! (発端は) First of all, I woke up late this morning and had to rush to class. (それから) Then when I got to school, I found that in my hurry I had forgotten to bring my math homework.

D: (わー、やっちゃったな) Oh, that's too bad. (宿題を取りに戻らなかったのだろうか) Did you run back home to get it?

R: (もちろん) Yes, I did, (でもね) but I had a lot of trouble finding it. (というのも) It had fallen behind my desk.

D: (じゃあ宿題は見つかったわけだが) So that made you even later.

R: (そのとおり) I got to class more than twenty minutes late and missed an important quiz.

D: (わー、最悪) Oh, no. That's really awful.

R: (というわけで) I'm so depressed about it.

もうお気づきのことと思うが、これは2の応用である。2では書かれている内容から、その内容を引き出すに至る潜在的な問いを推測したのだが、ここでは、話し手の発話内容から、その内容に至る話し手の気持ちを推測している。カッコ内の日本語は、その後の英文に対する和訳ではないことに注意してほしい。このような推理をすれば、人がどのような気持ちであるときに、どのような表現が用いられる(可能性がある)かを確認することができる。

たとえば、冒頭で相手の異変に気付いたDavidが、

いきなりWhat's up?とたずねることも不可能ではない。しかし、ここでは、たぶん普段はもっと活発なRikaが言葉少なげである点に着目し、そこから話を始めている。したがって、普段から言葉数が少ない人に向かってこのように話を切り出すわけにはいかない。そのような場合はどのように会話を始めればよいのか、英作文・英会話の授業で話し合ってみるのもおもしろい。You look depressed/sad/unhappy.やWhat's worrying you?などのほかにも、You look tired.やWhat's eating you?などもある。もちろん、これらの表現をどれでも用いてよいということにはならない。各表現の意味や使用域の違いに関する知識は不可欠となる。

さて、完全に落ち込んでいるRikaに対してどのような言葉をかけるか、この教科書では次のようになっている。

D: (なんとか励まさなくっちゃ) I know how you must feel. (そうだ、いい考えがある) Listen, let's go and have an ice cream or something after school and I'll try to cheer you up.

R: (嬉しい) That's nice of you, David. (お誘いに乗ります) Thanks. You're a good friend.

Davidはデートに誘うかたちで励ましている。さすがにそこまでは無理という場合は、どのような方法があるか、これまた話し合っても有意義だろう。そもそも何を言いたいのかが分からなければ、どのような表現を用いるかを定めることはできない。英作文・英会話で重要なことは、「自分は何を言いたいのか」という問いを自分に向け、それに答えていく姿勢である。

#### 引用文献

- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説改訂3版』 金子書房。  
 岡田寿彦 (1991) 『論文って、どんなもんだい—考える受験生のための論文入門—』 駿台文庫。  
 橋内 武 他 (2012) *Revised POLESTAR English Course II*. 数研出版。  
 長谷川瑞穂 他 (2006) 『はじめての英語学』 研究社。

(共立女子大学教授)